遭難事件の諸問題

技術・装備に欠陥
問題は逃避的傾向に

元気で出発した四人の生命を一瞬にして奪い去った今度の西穂高北稜遭難事件は学校内部及び社会に多大な反響をまき起し〝高校生は冬山の技術・装備の知識を身につける年令ではない〟という山岳専門家の意見を始め、彼等が教師に無通知で行った事から遂に〝高校生の職後の自治行過ぎ〟という名の批評を生むに至った。彼等は二度と帰らぬ人となった。事実に基いて学友のとった行動・態度を観察し冷静に批評し、反省しなければならない。（解説）

事件の経過

既に夏休みから計画をたて、出発したのは十二月十五日午後であった。出発の際来山先知事紙を出しその後十六日午後二時上高地帝国ホテルに到着した。翌日十二月十七日西穂高山荘に到着し十八・十九日二人は途中残してきた荷物を山荘に運び、他の二人は山荘からキャンプ地へあがった。二十日に立教大学山岳部員らと共に山荘を出発したが途中から別れて引返し翌二十一日キャンプ地に向い尾根の頂下（山荘より一五〇〇米）にキャンプした。二十三日・四日は風速四十米、気温零下三十度の猛吹雪であったためにテントが潰いものであった為救援隊と今井・金子両君はテント内で凍死、伊豆野・島田両君はテント外に出た際、強風に吹き飛ばされ遭難したと見られ捜索を開始した。又木校も二十四日急報した。現地ではすぐ立山岳連盟を主体とする捜索隊を編成し捜索に当ると共に、遺難の時刻はほっきりとしないが十二月二十四日午後長野県警察部の報告が発見し同日午後長野県警察部の報告により午後入った知らせで、ただちに集った山岳連盟関係と共に捜索本部を設け、同日午後十一時五十五分長野行列車で捜索隊第一陣が出発したのである。

その後二十五日には第二陣が出発し、十二月二十日遭難がつづけられテント内の二死体は山荘におろされたが行方不明の二体はまだ発見出来ず、雪どけを待つ他はないという。

ちぐはぐな……装備だった

今回の事件の最大の原因は、装備の欠陥にあったのではないか、という声は各方面から聞かれ、また批判された問題であった。ここでは装備という問題を物質面から考えて見ることにする。

一体事実はどうだったのだろうか？、問題のテントは「都立西校の山岳部員から彼ら個人として借りたものである」が、一般にいわれている様に、冬山用のテントではなくて、冬山用のテントの方が無くなって一枚なっていたのである」（山岳班員）というのだ。

また彼らはグランド・シート（寝袋の下に敷く物）を持っていなかった。その代りに玉ござの白いけるランシヤを持って行ったらしい（来山先生と捜索隊リーダーO氏

上高地高の遭難現場（朝日新聞社撮影）右あり日の島田・伊豆野・今井君

下）。

……一歩々々謙虚な態度で

出来る筈のことをしたと考えられるが、またそれを逆にみれば高校生がそうする装備では、やはり冬山でのキャンプは無理だったとみられるのではないだろうか。

考えがちがっていたとは思わないが冬山の恐しさを知らなかったのだ。島田君は三月に山へ登ったことがあるが同じ冬山といっても三月と十二月では全然違うのだと聞っている。また「自然に対してセンチメンタルな気持、あまったれる気持だったのではないか」（来山先生）という見方もある。とにかく「近年山へ行く人が多くなり、それを一般的に山は楽になったと錯覚をおこしている」という山岳会の意見から考えても今度の四人の行動は、明らかに確実な判断を欠いていたといわねばならない。

然しここで注意すべきことは、「彼らの行動には、昔の学生にくらべ逃避的な気分が強かった」（来山先生）「彼らの中のある者のクラブ活動は、多分に逃避的な匂いが感じられた」（教

彼等をそうさせたものは何か　あぶり出し

西穂高の遭難事件は私達に色々な事を考えさせる。この事件に対する皆の反響は一般に「軽率だった」と言うのと「偶然の災難であった」と言う意見の二つにまとめられると思う。確かにこの事件は以上の二つの要素を十分に含んでいたと言うものの、それだけで割りきってしまってよいものであろうか。

今回の事件の原因は、装備の欠陥にあったのではないか、という声は各方面から聞かれ、また批判された問題であった。ここでは、というより高校生としては、彼等は「山へ登る」事が目的であるより、むしろ「山へ行く」事のみが問題だったのだ。そこにおいて単に「軽率だったから」とか単に「偶然の災難」とか言えないものがあるのではないだろうか。

一方新聞等には自治の行過ぎ等と言う声もあったが、これはむしろ逆である様に思う。クラブでは彼等の後輩に対して積極的に注意し引き止めるだけの積極がなかった事や彼等が信頼して相談すべき自治体が学校の中になかったと言う事があの事件の一因になったとは言えても、彼が独自に行動した事は試験が終って間もなくであった。I君は三年生で受験を間近にひかえていた。S君は学校の出席率もあまり良い方ではなかった。常に何かに悩んでいた。彼等は山が困難な登山であると言う事を知っていたし、又山岳班として正式に行こうとしたなら許可されない事をも知っていた。しかしそれでも行かねばならなかったのだ。

……ちぐはぐな装備だった

今回の事件の最大の原因は、装備の欠陥にあったのではないか、という声は各方面から聞かれ、また批判された問題であった。ここで

……一歩々々謙虚な態度で

出来る筈のことをしたと考えられるが、またそれを逆にみれば高校生がそうする装備では、やはり冬山でのキャンプは無理だったとみられるのではないだろうか。

考えがちがっていたとは思わないが冬山の恐しさを知らなかったのだ。島田君は三月に山へ登ったことがあるが同じ冬山といっても三月と十二月では全然違うのだと聞っている。また「自然に対してセンチメンタルな気持、あまったれる気持だったのではないか」（来山先生）という見方もある。とにかく「近年山へ行く人が多くなり、それを一般的に山は楽になったと錯覚をおこしている」という山岳会の意見から考えても今度の四人の行動は、明らかに確実な判断を欠いていたといわねばならない。

然しここで注意すべきことは、「彼らの行動には、昔の学生にくらべ逃避的な気分が強かった」（来山先生）「彼らの中のある者のクラブ活動は、多分に逃避的な匂いが感じられた」（教

……高校生の自治のあり方

今回の事件に関して「学校における自治活動の行過ぎではないか」との意見が各部指導者はじめ各方面から少なからず出された。これに対して「生徒から提案をもちかければ一緒に考えて、今回の場合であったらこのように指導したい」（来山先生）また「眼ちをおこさぬためにはのような点で積極に生徒と共に行動することが必要であるが、先生としてはこの負担にそうたえられるものでなく、生徒を干渉されるとかえって消極にまわって行動が出る恐れがある」と戸野君はこれに対し「部員であれば強制があっても良いと思うが、彼らの行動は個人的なものだからその点文部省の見解はヒントがくるっていると思っている。今後の正しいあり方として来山先生は「だからすぐ出来ることは、班の会議を開いてよく考えたこの経緯のもとに責任ある生の山行として見直決して無茶なものでもなければ無理でもない。自由な機動を制限した上での充分な自由行動がとれるようにすべきだ」と。後日、立教大学首脳部は「日頃無日の本当に自由な

……多大な立大生の犠牲

事件の最大な犠牲の中で、大部分を師匠に、になった立大山岳部の人々は、死体収容のために彼らの冬期の計画をすべて中止したのである。またミカンやカツソまで、想の厳しい寒さの中で、危険な作業に当った彼らの中には、顔面や指が凍傷にかかり、指を切りとらねばならない事態をまねいたある。そしてこの犠牲をすべて自の責に帰している山岳部の方々は「事件の経過など喜んで伝えるが批判めいた事はいっさい言う

……山での敗北は死なのだ

一般的な高校生の冬山の登山について、今後のあり方を日本山岳会では次の様に断っている。

日本の冬山は特にけっこうしいもので前に述べたように軽々と行けるものではない。多くの経験を持ち技術的にも優れ装備にも万全を期し、計画もしっかり立てた人でも遭難する時はするのである。強いて彼等に過ちはないのである。強いて彼等に過ちがあるとするならばそれは彼等の心の責任でなく我々全体の責任であると云わねばならないのではないかと考える。

今度の事は我々にとって大きな打撃であった。しかし我々は打撃を打撃としてのみ受けとり充分反省して彼等の貴い犠牲を無にせぬ様にしたいと思う。

冬山に若人の遭難ありときいて

―ある母親のうたえる―

様とさす雪に跡とどめたまきびる
若き命をもたら散らつ
厳命の授業にも拘らず未だ役立出せずときき
年あけて様に新たに降り積る
雪をかずきて幾日経にけむ
いつくにもあり知れざる若人に
寒々な吹きて様の冒風
親心はみな同じせつなきまおもひ。
四稚高峯の深雪をふみわけて
貽ってもみたしわけて
貽ってもみたしわけての魂々と

遭難に思う

山岳班々長　亀田晃之

もその生命を奪い去られてしまった。

これに対して高校の山岳部員たちは、登山を目指す限りの物的準備をしていたのである。果するに高校生の山行として見れば決して無茶なものでもなければ無理でもない。唯いわゆる山の熟達者の山行、山に対し経ての遭失の様に抗い得たであろうか。我々の年代に於ては不可抗の事も何年かたて話し合えると云う事かも知れぬ、そんな際どい所に彼等の貴い生命を奪い去られてしまった。

我々の仲間が死んでしまった。時、彼等にも確かにいくらかの落度があった事は認めざるを得ない。彼等はこれ以上山へ行く事が出来なくなってしまったのである。我々の友達としてはまったこの事が現に余裕ある計画を立てていた立教大の山岳部は事無事を得ているの風さえ吹かなければ彼等四人の風さえ吹かなければ彼等四人の山の技術を学ぶ為に出掛けた行ったのである。一時的冒険心や征服慾を満したいが為に山へ行った。そして我々の仲間は哀れにも

我々の年代に於ては様々な行為に対してその危険の限界ぎりぎりの行動を極く当然の事として行っている場合が多いのではないだろうか。今度の場合もそうした年代に於ける次第の異なる犠牲に過ぎないのではないだろうか。とかく山で遭難すると技術的にはるかに優る者の行動が批評してやれ装備不完全の計画不充分のと騒ぎ立てるのが世の常であるが、こんに対しては前にも云った様に高校生たる彼等には何等過ちはないのである。強いて彼等に

投書

つまらぬ学園歌

学園歌を先日歌ったが、残念ながらのメロディーが低いくわぬ。四中の優勇とのわぬるつぶし腹の中から声を出して歌える感力のあるものにして欲しい。「つぶす林に……」のところ。一年〇A

スケート教室を

スケート教室を是非開いてもらいたい。我々の学校位うるおいのないところはないように思う。以上責任ある解答を望む。

【解答】岩切先生談　まずスケーン場の方だが、スケンコールが一杯つまっていて今から申し込むのは無理だ。また学校としては時間の関係で出来ない。

前々号の「あぶり出し」高田君の文に対し二・三の投書が寄せられていますがこの問題は一応打ち切りとします（係）